

鮫肌釉の開発支援

支援先

天心焼研究会

【開発の背景】



図 1 鮫肌釉壺（江戸時代）

北茨城市の窯業は、享保 13 年（1728 年）の文献に登場しますが、産地形成されず、昭和後期には縮小期を迎えました。ここで、平成 7 年に地元商工会と協力した支援により、工芸陶器産地としての新たな命名「天心焼」、平成 21 年に地域窯元等有志での発足「天心焼研究会」、平成 23 年に県郷土工芸品の指定など、北茨城市の窯業振興の一躍を担っています。

平成 24 年に関本地区の窯跡を調査・採取した原料を用いたところ、江戸時代に生産されていた「鮫肌釉」（図 1）と呼ばれる釉薬に類似した釉調を得ることが分かりました。途絶えてしまった全国的にも珍しい鮫肌釉を復活させ、五浦天心焼の特徴としたいと当所に相談がありました。

【開発の経緯・支援内容】

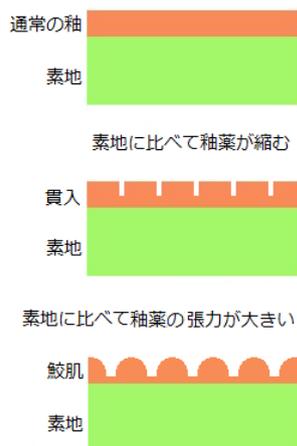


図 2 釉薬の断面図

- 1) 関本地区の原料には鉄分が多く含まれる事から釉薬は黒色に限定されるため、各窯元が調合により独自色が出せる白色の基礎釉開発を目標としました。
- 2) 釉薬には冷却過程で素地より縮むために起こる「貫入」と呼ばれるヒビが入る事があり、鮫肌釉は熔融までに張力が働き大きく縮んだ後、冷却過程で縮むことが実験で分かりました（図 2）。
- 3) 大きく縮れる材料を検討した結果、ゼオライトーベントナイトー木灰の配合としました。
- 4) 基礎釉に黄色やピンクの顔料を添加することで、各窯元が独自色を出せる調合例を示すと共に、欠陥を逆の発想で装飾として用いるよう提案しました。

【開発した製品の紹介】



図 3 鮫肌釉を用いた製品

天心焼研究会会員 2 社から鮫肌釉を用いた製品を 1,300 円～4,500 円で販売しています（図 3）。消費者からは鮫肌釉の珍しさや江戸時代に遡るストーリーに関心が寄せられ、滑り止め機能などに使えそうだとの声をいただきました。今後、震災復興事業等、話題作りや新たな用途開発が期待されています。

○展示イベント：陶と暮らし～笠間焼フェア 2013
～（11/2～4、於：笠間工芸の丘）、
天心焼展（11/28～12/2、於：よう・そろー）

○常設販売：天心焼物産センター てんごころ

基礎となった事業

平成 24 年度 試験研究指導費（技術相談）

現在の担当部門

工芸技術部門

部門長

佐藤 茂

TEL:0296-72-0316

主任研究員

常世田 茂